

難になつて來やうと思はれるのでありますから、日本の教育社會では前以て斯ういふ問題をも解決

して置きたいのであります、これで今日の講演の大體を終えたので御座います。(終)

モンテッソリの教育

此の一篇は「心理研究」三月號に掲載したるものですが幼児教育に直接の關係を有する新問題ですから本誌に再録しました。

倉 橋 惣 三

近頃教育上の新問題と云へば、獨逸のケルシエンシュタイン氏等の唱導して居る作業主義教育と、伊太利のモンテッソリ女史に依つて實行されて居る所謂モンテッソリ式教育法とであらう。元來、教育上の新主義が起るには、其の原因とも理由とも云ふべきものがある。従來の教育主義に對する思想上の反動から起ることもある。新しい時代の實際上の要求に促されることもある。或はまた、教育の基礎學としての心理學上の

根據から立てられて行くこともある。而して作業主義教育が其の精神に於いては、必ずしも最新のものでなく、亞米利加等では疾から説かれて居たことなるにも拘らず、更に此の新しい名稱を以つて獨逸の學者に唱導されるやうになつた譯は、蓋し時代の實際的の要求も大に與つて居ること、思はれる。所謂、「役に立つ教育」といふことの實際上の註文が次第に切迫して來た結果とも見られる。然し作業主義教育のよつて立つて居る基礎は、かういふ實際上の必要のみではない。もう一

層深い處に心理學上の根據がある。一口に云へば、精神陶冶に於ける運動感覺の價値を認めた心理學上の所説に基いて居るのである。モンテッソリ教育もまた、一方から云へば時代の要求に應じて居るものであるが、其の大根柢は、矢張り心理學上の所説に基いて居る。即ち兒童の自發性を研究し信頼して、どこ迄もこれを活用して行かうといふのである。即ちこの新しい教育上の問題は二つとも、其の根柢に於いて心理學上の批判を俟つて居る。或は既に批判を要しないならば説明を俟つて居ると云つてもよい。

作業主義教育に就いては既に多く紹介もされ論ぜられても居るから、茲にはモンテッソリ教育に就いて少しく考へて見る。

二

マリア・モンテッソリ女史 (Maria Montessori) が初めて其の新しい教育法を始めたのは、今から六

年前(一九〇六)のことである。其の以前、女史はローマ大學の精神病學の助手として勤めて居る間に(女史はローマ大學の醫學士である)、低能兒童に多大の興味を有し、専ら其の問題の研究に従事した。其の後、二年ばかり實地の教育にも従事したが、再びローマ大學の哲學科に入つて、七年間の永き心理學及び教育學の研鑽に専心した、即ち女史の事業は最も深き學術的研究を基礎として居るものである。恰度此の時ローマ市の社會的改良を目的とせる或る協會に依つて四個の貧民學校が建てられた。女史が従來低能兒童教育に施した方法を應用して、普通兒童の教育に試みるの機會を得たのはこの學校に於いてである。

これ等の學校は伊太利語で Casa dei Bambini と呼ばれてゐる。即ち學校と云ふよりは「兒童の家」と云つた方が適當である。「兒童の家」には先づ次の如き規則が設けられた。

(一) 兒童の健康、生理的及び道徳的發達は、其の年齢に適應せる課業と練習とによつて、注意せられなければならない。

(二) 各「兒童の家」は女主事、醫師及び番人によつて監理され三歳より七歳に至る兒童は、何人も入ることが出来る。

(三) 「兒童の家」に出席する兒童等の父兄は、何等の謝禮をも要しないが、然し左の義務は固く守らなければならない。(イ) 兒童を通學させる際には、身體と衣服の清潔を要し、必ず適當な前掛けを用ゐさせること、(ロ) 父兄は「兒童の家」に於ける女主事を始め職員全體に對して、充分の尊敬を拂はなければならない。少くも一週に一度は母達は女主事に面會して家庭に於ける我が子の状態を報告し、教育上の指圖を受けなければならない。

(四) 次の如き者は「兒童の家」に入ること許

されない。(イ) 顔を洗はず或はだらしなき態度に來るもの、(ロ) 到底訓練に従順ならざるもの、(ハ) 「兒童の家」の教職員に對し敬意を缺くもの若しくは悪行を以つて此の教育事業に妨害を加ふるもの、子弟、

相手が貧民のことであるから殊に右の如き嚴重なる規則が必要であつたのであらうが、女史の根本主義たる自由教育を存分に施す爲めには、先づ斯の如き前提條件を置くことは最も當然であつたのである。

モンテッソリ女史の教育主義には、根本となる幾つかの約條がある。其の第一は兒童の全自由を尊重し、其の自發的自然勢力を残りなく活用せよと云ふことである。女史の考へによれば、訓練されたる兒童とは、自主なる兒童のことである。即ち人生の諸種の規範に従ふべき際にも、決して他力的ならず、自制克己に出で得る兒童のことであ

る。但し他人の害となるべき底のことに於いては其の自由が制限せられなければならないことは勿論である。苟くも、さうでない限りは、兒童の自由は全く許可されなければならない。許可さるゝと云ふよりは寧ろ教師によつて遵奉されなければならぬ。教師は兒童のこの自然性を遵奉し得る寛容があるのみでなく、進んで興味を持ち得るものでなければならぬと云ふのが女史の意見である。女史の見解によれば、この自發性に干渉することは即ち生命の眞髓を阻害することなのである。是に於て兒童の訓練は即ちどこ迄も兒童の獨立の發達であらなければならない。兒童が他人によつて奉仕され、また他人に依頼して居る間は、未だ眞の自由ではないのである、衣物を着せられたり脱がせられたりすることに於ても、食物をたべさせて貰ふことに於ても、人にのみしてもらつて居るのは、未だ眞の自由でないのである。而し

て女史の實驗によれば、適當に訓練されさへすれば、三歳にして十分にこれ等のことが出来る筈だといふことである。勿論、子供に衣物を着せ、食物をばぐくんでやることは子供に自分でさせるよりも、簡單で容易なことである。然し世話ばかりやいて居るのは、僕婢の業である。子供に自分でさせるやうにするのが、始めて教育者であると云ふのである。

モンテッソリの教育には、賞罰と云ふことはない。兒童自らの熟達の感じが即ち賞である。罰といふのは單にこの感じのないことに外ならない。別に外から来る恐怖では少しもないのである。女史の教授は最も簡單を主として努めて餘けいの説明を避ける。即ち複雑多様な言辭を以つて、兒童の頭腦を混乱させ、或は要點を失はしめるやうなことを忌むのである、教師はまた兒童の嗜好に反して、學科の反復を強ひてはならぬ、又如何な

る場合に於いても、兒童に其の失敗或は不理解を憂慮せしめてはならぬ。

かういふ殆ど極端な程の自由主義であるから、女史の學校は傍からは兒童が皆遊んで居るとのみしか見えない。去年十二月『ニューヨーク・タイムス』が其の日曜附録號で、亞米利加に於けるモンテッソリ式學校の記事を掲げて、「机も組分けも、諳誦もない學校」と題して居るのは、要を得た形容と云ふべきである。床の上に腹這になつて、色を塗つて木片を以つて遊んで居る子供がある。目隠しをして指尖きばかりで、いろいろの品物の當つこをして遊んでゐる子供がある。參觀人の來たのも氣附かばこそ、室の一隅で一生懸命獨りで黑板に何か書いて居る子供がある。手蹟の餘り見事なのに驚いて、何時から稽古をして居るかと問へば昨日からだと答へる。かういふ風にして、兒童の方から用があるか、質問でもなければ教師は殆

ど何等の干渉をも與へないのである。子供等は自分の氣の向き次第、二時間の日課を自分の好きな課業だけして居てもよいのである。自發的注意が教育の唯一の基礎だといふ原則から、此の干渉も加へられない。かう云へば如何にも亂雜極まる有様になりさうであるが、實は其の反對である。「兒童の家」に集る子供等は總べて極貧の家の子であるけれども、其の風貌と云ひ、行儀と云ひ實に整然として秩序が亂れない。

この特種學校は午前九時から、午後の五時半まで子供を預る。但し課業としては二時間乃至高々二時間半に限られて居る。朝子供等が登校すると先づ化粧室へ行く。そこで自ら手・顔・首・耳などを洗ひ、子供同志で助けあつて、前掛けをつける。次に皆で學校中を廻つて見て、少しでも不整頓な處、不潔な處があれば、子供等自らで片づける。其の後で十時までは庭で遊ぶことになつて居る。

それからが課業であるが、モンテッソリ教育に於いては、運動感覺の教育が第一の重要事項になつて居る。即ちボタンをかけたたり、脱ぎしたり、紐を結んだり、ほどこいたり、そういふ指さきですると云ふやうなことが、幼い方の子供の學課になつて居る。その他、普通の幼稚園用の恩物、及びモンテッソリ獨特の材料も用ゐられるが、兎に角、一般教育に於いて、ゆるがせにされ勝ちな觸覺及び筋肉感覺の訓練が、盛に行はれるのである。積木をするにしても一度目を開いてした後、目を閉ちて再び試みる。即ち「指で視る」練習が重んぜられて居るのである。

女史は子供の自發性として、これに伴ふ自然の興味とを利用して、書き方も、読み方も、數へ方も見事に熟達させて居る。普通の學校の二年或は三年級の兒童と同等の能力が此の學校では、四歳乃至五歳にして十分に得られると云ふのである。素と

りこれが爲めに生ずる無理も過勞もないことは云ふまでもない。何れも外から見れば遊びの形を以つて教へられて居る。字を教へるにしても習字といふやうな、學科的作業を初めから強ふることはない。女史の方法では大體次のやうな順序が用ゐられる。先づ初めに自由なる筆の動し方を練習させる。それにはいろいろの形をした板片を與へて、紙の上に其の縁をなごらせる。そして其の中を塗らせる。これでいろいろの方向に自由の形に筆を動かして行く練習がつくのである。次にはアルハベツトを切りぬいた板のやうなものがあつてこれを見たり觸つたり並べたりして居る間に、先生から音を聞いて其のいろいろの感覺の結合が出来て行く、第三にはちらしてある其のアルハベツトの中から例へばを探して御覽といふやうなことをする。又其の一をとつて、これは何でせうかといふやうな問を出す、總べてかういふ順序で子音

と母音を結び付けて、次第に文字に進んで行くのであるが、我が國の文字の場合とは自ら違ふから詳説は略する。そして字を知つて後に更めて白墨を興へれば、運筆の練習は既に出來て居るから、子供は面白がつて、ずん／＼字を習くと云ふ工合である。全く自分で自分を教へるというてよいのである。數を教へるにしても、抽象的な數の觀念から授けてゆくといふやうな事は決してしない。先づ衛生上の注意から特別に清潔に保存された幾枚かの貨幣を用ゐて、大きい貨幣を小さい貨幣に兩替するといふやうな遊びから、數の練習をされてゆく。其の他詳しく言へばいろいろのこともあるが、兎に角、子供は普通の遊戯をして居る場合と同じ自由と興味とを以つて、全く自發的に讀み方も書き方も數へ方も、立派に發達して行くのである。

三

モンテッソリ女史が自ら其の教育法を述べた著述が二つある。一は一九〇九年に、一は一九一〇年に出版されて居る。然し遺憾なことに予は其の書を読むことが出來ない。Metodo della Pedagogia Scientificaと題さるゝ方の獨譯は目下進行中であり、英譯も遠からず出版さるゝ筈であるから、詳しいことはそれを俟つて再び紹介することが出來ると思ふ。現在英文で紹介されて居るものは、昨年五月と十二月の『マッフルア』雜誌及び同じく昨年十二月の『ベダゴデカル、セミニナリー』誌上に於けるスミス女史の論文が主なるものだと思ふ。予の此の紹介も主としてスミス女史の文によつたのである。其の他、前に一寸あげた『ニューヨークタイムス』の日曜附録によつて、米國に於ける唯一のモンテッソリ教育所たるアンネ・イー・ジョーシ嬢の「兒童の家」の狀況を知り得た位のことによつて、伊太利本國に於ける其の後の景況及び瑞西

等に於いて實行されて居る種々の試みの結果等に就いては、多く知らない。殊にこの教育法を普通の小學校教育にまで應用しようとする興味ある試みの結果もまた、少しも知らない。従つて斯の如き貧弱なる知識を基として、十分なる批判を試みることは、もとより困難である、たゞ大體に關する所感を述ぶることを許して貰ひ度い。

モンテッソリ女史の教育法の精神は、其の方法に就いて見ればいろいろの新工夫、新発見が多いのであるが、其の根柢たる心理上の基礎は、前にもチヨツと述べた如く兒童の自發性の教育に外ならぬ。抑々兒童の自發性の科學的綿密なる研究は兒童研究の發達と共に近頃盛に注意されて居るところである。従つて其の研究の結果は未だ十分完全な云ふことは出来ない。然しこれは純粹研究上の言であつて、教育的着眼と云ふ點から見れば、兒童の自發性は必ずしも今に始つた問題ではない。

殊にフレーベルの幼稚園教育の第一原理たる自己活動は即ちこれに外ならぬのである。由來、多くの人によつて其の着眼は繼承され、益々發揮するやうに努められて居る。而も形に従つて内を忘るゝことは、總べての偉大なる主義の繼承者が屢々陥る處である。即ちフレーベルヤンはフレーベルの此の着想を忠實に繼承しようとなつて、何時の間にか形ばかりの繼承に流れたものが尠くない。茲に於いて元來兒童の自己活動を十分に尊重すべき筈のフレーベル主義幼稚園教育がなかく以つて、兒童の自發性を毀損して居るやうな例も尠からぬことである。そこで幼稚園の教育に對して再び兒童の自己活動尊重の要求をさへ提出さるゝやうな奇觀を呈して居る。のみならず幼稚園以上の小學校教育に於いてすらも、舊來の觀念主義注入教育に反抗して兒童の自發性の發揮を尊重することが大なる一の傾向となつて居る。實際上顯

著なる實行としては、米國のジョンソン氏の「遊戯による教育」の如きさへもある。又、前に述べた作業主義教育の如きも或る意味から云へば、兒童の自發性を利用せんとするものとも云へる。即ち兒童の自發性をより多く教育上に利用せんとすることは、新しい教育者、殊に兒童研究を基礎とせる教育者の一般の希望と云つてよいのである。唯、これを實現するだけの「人」が多くなかつたのである。マリア、モンテッソリ女史は即ちこの「人」であつたのである。其の深奥なる學理的知識に基づく確信と、生れながらの教育的技術とに依つて、この古くて新しい教育上の原則を活きたものにして、議論でなく實驗に依つて證明した「人」なのである。

余は茲に兒童の自發性に関する詳細の論議を試みる暇を有しない。又、フレーベル以來の此の主義の教育意見に就いて、細論を繰返す必要はない

と思ふ。唯、今迄は單に理論上の要求として、又、理想上の希望としてののみ、憧憬して居た事實、或は寧ろ豫想以上と云つてもよい程の結果が、こゝに目の前に證明されたことを見て、吾人の從來の理論的確信が事實的に裏書されたことを喜びにたへぬのである。但し此の裏書の流用効力に就いては其の範圍を何處まで擴張してよいものか知らない。又、これが單に方法の力として何處にでも實効を奏し得るものたるや否やも、輕々しくは言ひ易からずと思ふ。今や、モンテッソリ教育法は世界の教育の一流行として、次第に適用されつゝある。我が國にも専門家は勿論、嘗て萬朝報の論説欄に女史の名を紹介せられて以來、所謂、放任主義教育者の間には、非常の興味を以つて傳唱されて居る。然し吾人は總べての教育的新現象に對して、重要な二の態度を忘れてはならぬ。即ち純研究上の態度としては、何處までも贊成論を

するとしても、實行上の態度としては、其の新方法を如何に活用すべきかの謙遜なる慎重なる態度を要すべきことである。余もまた、モンテッソリ教育法の紹介者の一人として次のことを明かに附言して置かなければならない。

(一)モンテッソリ女史の主張する兒童自發性の尊重と、其の教育上の可能とに就いては、萬腔の同意を表す。

子供と胃腸病

成人の胃腸病は、さ程重大な病氣ではありませんけれども、子供にあつては決して輕視することの出来ない病症であります。年々この爲めに命を失ふ子供も尠くはないのです。子供と申しても年齢の少ない程これに罹り易く、且つ危険の度が多

(二)然し茲にいふ兒童自發性の發揮といふことと由來誤解を伴ひ易き教育上の所謂放任主義とは暫く區別し置くを要す。

(三)即ちモンテッソリ女史の精神を離れざる其の方法の適用に就いては、素より推奨者の一人なり。而も其の「人」に非ずして單に方法のみを用ふる者の陥り易き危険に就いては、お互自分の十分なる警戒を約束せざる能はず。

醫學士 石塚保吉

いのであります。子供にも哺乳兒、即ちお乳ばかりをたべて居る時代と、稍大きくなつて普通の食物をとつて居る所謂兒童との二ツの時期を分けることが出来ます。そして哺乳兒の時代が一番で胃腸病に胃され易く、又それに伴つていろ／＼六